佐文山戯書 二丁　紀文傳 二丁　宗眼一輪牡丹目賀 四丁
久米平内石像考 四丁　右近丈彫手 小兵衛人形 六丁
羽生村累古跡 七丁　歌比丘尾八丁　安楽菴落語 十一丁
露の五郎兵衛辻諸 十二丁　鹿野武左衛門仕方話 十三丁
大津繪考 十三丁　辰之助鎗踊猫狂言并肖像 十三丁

近世奇作考

二

近世奇跡考巻之二

江戸　山東軒主人著

一　佐文山戯書

佐々木氏名ハ龍袞字ハ淵龍文山と号シ墨花堂と稱ず。俗称百助。玄龍の弟子。西空淫ふ住ず。志風流ふ厚く。兄玄龍ともに書を以て名々一。西ゑに都鄙神社佛閣の一匾額皆書を文山ふもとむ。性甚酒を好ミ。醉裏筆をふるへハ殊ふ絶妙ゝ。世ふ醉龍の後身ゝ云。複本其角ハ玄龍ふ書を学ぶ。西ゑふ文山ゝ書くゝ酒友の交りふかし。一日文山富家の主人一説ふ兄文ト云および其角と花街にあそび。酒ゝけふハる時。揚屋の主人文山ゞ書名ゝ書を知りて。春山櫻花を画ゝる。屏風を出ゝて賛辞をゝ。文山筆をとりて此所ふ

便無用と書き。主人これを見て頗不興の色あり。其角筆をとゝめ。こゝろつぎて花の山と書つけゝる俳諧の一句ありける

此所小便無用花の山

主人大ゐに感じ。つひに家宝とせり。其比あづま童のにぎりあきら。此ゝ小便無用佐文山とゝなれりけるとぞ

此事世ゝ伝へて風流の話柄なり。文山享保十年乙卯五月七日病て没せり。享年七十七芝増上寺塔中浄蓮院に葬る

二　紀文傳

紀伊國屋文左衛門は材木問屋を家業として。世ゝさこえ豪家の性活氣ありて。常ゝ花街雑劇ゝ好びて任侠をこゝろ千金をあげうちて快しとせり故に時の人紀文大尽と称ず。漂名一時ゝうこゝ。宝永の頃まで。本八町堀三丁目にて一町紀文が居宅あり。毎日定りて。夏さし七人づゝ来りて夏をさまこゝ八客をむかへる度に。あらしき夏を去きうくるも忘れぬ。此一事をもつて。それ豪富なるを知るべし。紀文が家ゝ出入せし夏の子孫今猶本八町堀二丁目ゝあり。此事を かゝりさ。又一時揚屋町泉屋平四郎がもとゝて外ゝ小粒金を入て蒔あるゝと云伝ふ。正徳の比家を捨へ剃髪して。深川八幡一の鳥居の辺ゝ住しが。享保十九年四月廿四日。其隠宅ゝおいて身まうぬ。深川霊巌寺塔中浄等院に葬る。法名を帰性融相と云

紀文俳諧を。晋子其角ゝ学び。千山と称ず。紀文其角敬雨等と共に千山宅にて八乙女弁樂男よりしゝ證左ゝあり

紀文
つい追儺の圖

大毋衣のうしろを押や瓶の菊　　千山ヨリ菊ヲ得て　月

隅に巣をと陸るこそ好らん五月雨　　千山亭新宅雪舟の絵に　月

柯葉集　もりかへる老の眼や土用干　　千山亭にて　敬雨

悼紀文七父
手あふりやくちに中る膝のうへ　月

〇紀文ハ一代の富家なりとおもふ人おほし。已に父あり。父紀州熊野よりも江戸にいでゝ一代にきはめりとぞ

菊のちり　其女撰
三徳の揩も洗ふまで裏の菊　　千山

香非時　に其角一周忌に紀文が手向の句あり
黒方や年ハ経れども朧月　月

類柑子　に風流をそぬきの飛花を惜むとかきて左の句あり　是も其角が追悼の句也
今もいま錦繍の人よふこゝろ　月

紀文がうへにつきてハさまざまの奇談あれども。人口に伝ふるのこゝろ。たしかなる証もなけれバ。これもらしつ

後ハ昔物語に寛延の比。俳諧師存義。小網町より深川八幡一の鳥居の北側にうつり住。其庵ハ紀文が衰へて後住ける家なりと云。くはしき話あれども爰にハ記しおかず

(三) 宗珉一輪牡丹目貫

宗珉横谷氏。名ハ友常。遯菴と号す。俗称次兵衛。檜物町に住す。一輪牡丹の目貫ハ世に一具の名物也。伝へて云。宝永の比紀文宗珉に牡丹の目貫をのぞみ。手附金十両をおくる。三年過るまで出来ざれバ。紀文待侘て。しきりに催促せしかども。仕方宗珉が意にかなはずとて。手附金をかへしぬ。其後半年過てやう上りたるをもて紀文にあたへける。富家某にあたへ。某金五十両を以て謝物として宗珉にあたふ。これより生涯一輪牡丹をほらず。世に一品の名物となれりとぞ。宗珉享保十八年夏身まかりぬ

彼目貫某氏の秘蔵なるを。友人戸張氏。去年一覧して。露ばかりもたがへず。うつし図をつくりて。下にあらはす

惣金

宗珉作　ありつけらくのごとくにあり

四　久米平内石像考

淺草寺の境内ふ。久米平内の石像ゑ云ものあり。何人の像ゑ云ふ詳あらず。瀬田問答ゑ云。氏ハ久米ふあらず。兵藤平内ゑ米ゑ云。妻ハ久米氏ゑ。ゆえふ世ふ誤て久米平内ゑ云。飯嘉善提寺ハ駒込鰻縄手。海苑寺大智山ゑ云禪寺ゑ。ゑゑたに青き生石の夫婦同會の墓碑あり

兵藤氏　無關一素居士　　久米氏　松室瑩壽大姉

右の法名あらびでかり付あり。此碑平内ゑ米。存生の時建置

を。死後ふ死せる年月を彫り入ざれバ。其年月詳あらざる所。淺草寺。平内ゑ米石像のかり家のしろに。又同會の墓碑ありて年月をゑるを

上ニ仏像アリ　無關一素居士　天和四癸亥年六月六日　（第二癸亥ハ天和三年ふあるゑこれも平内ゑ米存生の時建おきたるを後ふ年月を彫り入ゑる時の誤あらめ）

松室瑩壽大姉　貞享二乙丑年十二月十三日

かゑのごとくあれバ。死せる年月ハあきらかなりゑいへども。いづれの家に仕へ一武士ゑ云ゑ。諸説ゑ異ふして詳あらず。浪人一て赤坂ふ住ゑゑ云。淺草寺後門の外金剛院ふ借地一て住ゑゑいへり。強勇の者ふて。鈴木九太夫入道正三石平ゑ人ゑ云因果物語二人びくふの作ゑ。の門人ゑあり。仁王座禪の法を修行ゑ。彼石像ハゑゑかゑちゑりゑぞ

五　右近人形

已往物語 写本 ふ昔右近源左衛門と云若者京都より下り三味線引一人地〻〻〻〻一人ぶて藝をする時今のかつ〻ぶと云ものふく黄いろのふくさものふをき糸を付額ふりふりて月代をそくまを面倍奇麗の若者あれど女のごとくに又色ある。扨藝ハ海左下り山崎下りあぐと云左行の敬を地〻〻〻〻ふ〻〻〻〻せそれをふ舞ふ〻て舞ふ。又八業平餅を買ふふを独狂言ふ舞ふ。諸人ハもーろぐろてん物を。山源左ゑつ黄なるふくさものふりふる倖を。人形ふふふて也作り。紙ふて張ぬきふも作りて。おびたゞしく賣る云〻

案ふふ。寛文二年。市村羽右衛門唱哥子ゞ骨董集ふ詳〻

六 小兵衛人形

江戸ふ名ゑく男えー。坊主ふ多ゑ云俳優ハ。延宝。天和。貞享の時を盛ふ経ゑる左外形ゑ。ゑら髪ふてかりをあふ又れバ坊主のごとくあれバ左ゑつふめり同時ふ坊主百多ゑ。坊主段九ふ坊主ゑぐいふ俳優あり。皆ふ多ゑをまねびゑり。ゑふふ多ゑが安を五月の境人形ふ作りそゞめて。ゑれを小多ゑ人形ゑつふ。ゑ後段十郎ふ太夫あぐをも。境人形ふ作りしとぞ 以上元禄六年 板本 四場井居百人一首ゑ 具角ゞ

小多ゑ人形の句左の如シ

五元集

此友や年をゑくゑゞ白髪二毛の身をゑゑふて杖どの左郎どのゑゑりとのゑれバ今の人形の風俗ゑゑ〻にふ多ゑふ

どいふ人形ハあり

同

我むゑー　坊主左夫や　花菖　具角

坊主ふ多ゑ心ーてく〻ふ多ゑ坊主とやりぬハ

坊主ふ多ゑふ多ゑ坊主ゑゑ羽ゑりを好ゑそ左ゑ〻。ゑれの中ふ多ゑ羽ゑり。この左ハつべーゑゑりぐーやと。ゑゑ〻ゑ。二朱判吉ゑ多ゑが大尽辞ふふ多ゑの坊主ゑの也羽ゑりを作りしも是之 洞房語園 ふ文 本朝文選 ふ支 考ゞ狂名と。坊主仁平ゑゑりーゑふ多ゑふふ多ゑ〻〻〻〻ゑる名ゑりいつゑ世ふめぐーれゑる左ゑおゑりふ

右近源左衛門舞圖　古画ヲ摸ス

元禄六年印本
四場井百人一首
此畫アリ模出ス

上ニ狂哥アリ畧

坂上小湯

談洲樓藏本

七 羽生村累古跡

下総国岡田郡羽生村百姓与右衛門妻かさね。正保四年亥八月十一日夫与右衛門が為に絹川において殺害せらる。其所を今にかさねが淵と云。与右衛門後妻をむかふる事五人。みなかさねが為にとり殺さる。六人めの妻娘きくをうむ。きく十三の年。寛文十一年亥八月中旬。その母も又とり殺さる。翌寛文十二年子正月四日より累が怨霊又きくにつきて苦しめけるを。同年三月十日尊き教化にあひて。かさね成仏しきく一命をたすかりぬ【死霊解脱物語 元禄三年板本】【新著聞集 寛延二年板本】等にしるして人よくしる事なれバくハしくしるさず。なほよりて案るに与右衛門堀越氏也。かさね実名るいと云。累の字かさねと訓ぜるものにまぐハしからぬよびけるなるべし。法蔵寺の過去帳に俗名るいとあるを以て証とすべき歟

○芭蕉が【奥の細道】に下野の那須野にてちいさきもの二人跡をしたひてはしる。ひとりハ小姫にて。名をかさねといふ。聞なれぬ名のやさしかりければと曽良が句に

かさねとハ八重撫子の名なるべし

とあり。これも累といふ名を訓にてよびしなるべし。かさねといふをきゝなれぬ名のやさしとおもへるハ。元禄の頃ハ羽生村のかさねが事さまで世にしられざりしにや。与右衛門後に剃髪して西入と云。延宝四年六月廿三日死す。其子孫今もなほ羽生村にありて。代々堀越与右衛門と名告る。当代にて西入より五六代相続すといへり。きくハ長寿にて。享保十五年戌五月三日七十二歳にて身まかりぬ。同村羽生山法蔵寺ハ与右衛門代々の菩提寺也。累。助。さく。三人の墓あり。累。助成仏得脱の絵曼陀羅あり。明顕瑞祥録と云古書二巻あり。かさね等が事跡を録せり

法蔵寺過去帳写

理屋松貞信女　俗名ろい行年三十五
正保四丁亥年八月十一日。初法名香誉妙林

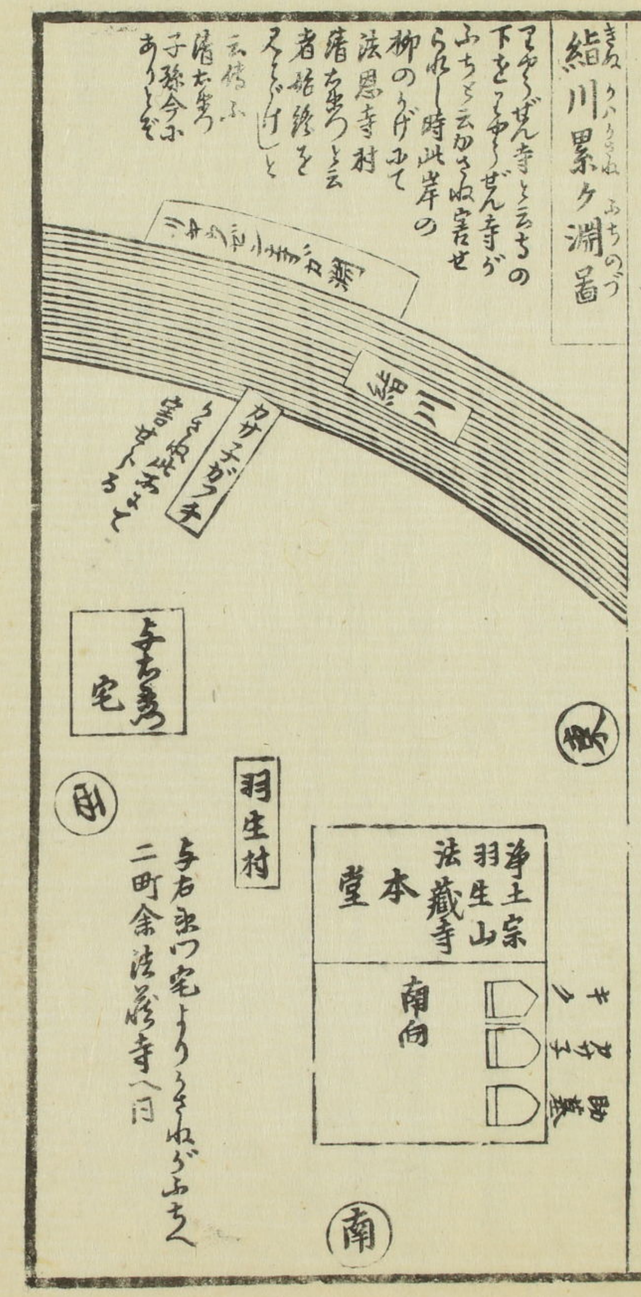
單到真入童子　俗名。助。三歳。寛文十二壬子四月十九日此年号八助
得脱の年と実八慶長十七壬子年四月十九日死

榮譽不生妙槃信女　俗名きく行年七十二
享保十五庚戌五月三日

以上

結川累々淵畫

[illegible]の下を[illegible]ぜん寺がふちと云かさぬ宮せ柳のうげみて法恩寺村清左衛門と云者祐経を[illegible]と云伝ふ清左衛門子孫今ふあり[illegible]



八　歌比丘尼

殘口之記　歌比丘尼むりハ。脇挾一文匣ふ巻物入て。地獄の絵説一。血の池のけがれをいませ不産女の哀を泣たる業を。年竜の戻りに。烏牛王配りて。熊野権現の吏觸めきこうしゃ。いつのわぐようかく一白粉紅つけて。付髪帽子に帯たぐ廣く成一云下畧

東海道名所記　万治中板本云。比丘尼ども一二人いで来て。家をこふ頌歌八字もとけ一ぬ。丹前こやつふ子ありて。たぐありくこ出こしくひきづりこるぐこ次ふ紫垣明暦中こ中こんもと山の女の奴どもの踊歌ありこを。比丘尼節ふのせてこふ。みぐこの眉わこく。薄化粧一。歯雪よりも白ろく。くろき帽子ふて頭をあぢふつむ云下畧。かぬ熊野比丘尼の風万治の比こや変りこり

くきぬおんあ中〜のづ
累怨霊圖

熊野比丘尼繪説圖

○紫の一帙　ふめつゝ町ふ。永玄お雅。お板。ぞ後ぞ。ふ名とりの比丘尼あり。ぞ名ぞ。ふ。ぞ。天和中のすえ。めつゝ町ハ神田多町の古名ゝ此歌びくにゝふ今ハ名とて名のみ殘れり

九　安樂菴落語

安樂菴策傳ハ。おとゝ。だ。ゝの上ゝ。元和九年。七十の年醒睡笑といふ笑話本八冊をつくる。万治元年上木せり　此人茶道ふかいて名ゝ。ゝよいへど。おとゝ。だ。ゝ。ゝ上ゝ。ゝるゝを忘る人まれなり。世ふ稱ふの。安樂菴の列伝ハ。此人より出ぬ

十　露の五郎兵衛辻話

支考が本朝文鑑ふ露の五郎兵衛辻談義の説とふ文をのせて云。此者ハ夷洛ふ名を釣ゝ出て。洛陽の仏事祭礼ふ彼が芝居を張ざるゝ。世ふ云辻だ。ゝの元祖ゝ云。延宝。天和の時代ゝ祇園真賢が原或ハ北野ふ。ゝ。ゝふ露が。ゝ。ゝとふ草紙五冊あり

享保十三年印本徽雨の梅の図あり
きさらづ一ゆてあらづ

延宝五年板本 かくれ笠ふ

屋かくが耳ふおちくる初岩　重高

蜜ろふ。此百屋かくが耳ふおちくるを。露の五郎兵衛が。過ぎ去りしを。
て。連歌師が。露とゝふ字を質ふおきくりとゝふすを。ふくまもくり
類船子 ふる 「命ふかる五郎兵衛の蜜とゝふ名ありを。名ときを知久
上方のひゆくんろ。江戸の志ろ新字ゆくんろ」

士　鹿野武左衛門仕形話

元禄の頃江戸ふ。坐敷仕形ぐ臣とゝふすおこ五る。長谷川町の。鹿野
武左衛門ゝふ者。上ま之盛の巻筆ゝ云笑話本五冊をあらハ出。
横山町三丁目。休慶。中橋。伽羅ふ左衛門。同不。伽羅四郎斉ふぐ
ゝふ名あり。貞享四年板 江戸鹿子 元禄二年板 江

戸圖鑑ふ入る

十二　大津繪考

大津繪。或ハ追分繪ともいふ。いづれの時代よりかき始しゐや。詳ふ
しらず。元禄三年板 東海道絵図 ふ。大津大谷の辺。伝繪いろ〳〵あり
ちなるまた。又芭蕉の句ふ

大津繪の筆のまゝ　めハ何佛

かゝれば。元禄の比ハ伝統をもつて。にかき　　本朝俗諺志

ふ。飛州の山中ふ。毛坊主といふ者あり。俗解ふて。常ふハ農業木
樵。人死ぬれハ導師ともなりて。これを葬ま。本ちゝハ大津繪の
十三佛なり云と。世ふ傳へて。浮世又平ゞかきもゞむとゝ
も。たゞしらぬる証なし。案るに浮世又平ハ。越前の産本姓ハ荒
木。世の姓岩佐を冒よく時世の人物を画ふして。時の人

浮世又ゝ染ゝ孫ゝ。世ふいへる浮世絵ハ〳〵ふ誤り〳〵。享保四年
頃城反魂香 ゝふ浮瑠璃ふ。土佐のまゝ浮世又平重かきゝい
ふ者。大津ふ住て絵をかきゝるゝ。をつくれるゝ。妄説を
傳ふる。或ハ別ふ大津又平ゝふ者ありて。かき始む。享保の
ゝまで其子孫ありしと云。予ゞもをさ〳〵ふる。ふるき大津絵に。八十
八歳又平久吉ゝかきて花押あり。前の説のごとく。大津ふ又
平ゝふ者ありしを。浮世又ゝ染ゝ。ふ〳〵てかの浮瑠璃につ
ゝ〳〵。虚説を傳へ〳〵ふん。さハいへ。支考ゞ 本朝文鑑 ゝ。
浮世又ゝ染ゝハ大津絵の元祖ゝいふ 文鑑 ハ享保三年の板ゝ。
彼浮瑠璃より。一年ゝ人ゝあれバ。其前ゝ〳〵ゝ傳へ〳〵ゝかもゝ
ゝ。ゝゝれかゝまれ 好古日録 ふゝるまゝ。又ゝ染ゞ傳ゝゝふ。

大津にて賣画を業とす。あるべしとおぼえぬ。予又を宋が正筆なりとめて。其画風をうつして。大津絵を作べき風あらむ。古代の大津絵を考るに。古土佐の風味なほ残れるやうにおもはる

貞享四年印本風流旅日記に大津追分伏見の道中器奴やり持のいきほひのおい絵をとるが大谷云。ぬば貞享の比已に奴のやり持る絵あり。とおぼ

十三　辰之助鎗踊猫狂言并肖像

水木辰之助。元禄中諸人に免でゝ歌舞妓の女形なり。元禄四年。京四条より始て江戸に下り。市村竹之丞座。顔見せ。四季御所桜を云。四番つゞき狂言を興行せ。是を辰之助が土産狂言を云。辰之助なる姫の役。第二番目に狐をどりの所作。第三番目に猫の所作をせ。江戸中こぞりて賞美し。此狂言を見ざるをぞ恥とせし。○猫の所作の意趣。ある邪の中くゝ有て。恋志ふ男。我実の兄なることを知れて。夫婦しる或ありて。胡蝶に成くるふ狂言。こゝを辰之助がゆゑの狂言とて。むり人のちくまでも

焦尾琴　猫恋白合　疑恋

花の夢胡蝶に似くり辰之助　兵角

寄舞妓恋

恋種の猫の狂言あけぼのに　堤亭

五元集

辰之助に成つゝ

煤掃や諸人がまねる猫をゝ　其角

元禄四年在言本
四季御所櫻三の巻ニ
此圖あり　ちさくつゆて
ほうぐりもふぶえも
ぶせり

京　川津山白藏本

同書三の巻ニ
此圖あり

特撰庫

元禄十三年・板本滋男評林ニ
此畫アリ是スナハチ
辰之助ガ肖像ナリ

木村太朝蔵本

水木辰之助

奇跡考巻之二終